

千三百年余の歳月を重ね、現代に継承されてきた式年遷宮。
二十年に一度の至高の祭典一、遷宮へ至る道には、およそ三十にも及ぶ祭と行事が執り行われる。

七年前…。最初の祭である山口祭が新緑の御杣山で行われた時、遷宮の近づいてくる気配がはっきりと感じられた。

常若 とこわか —古くて新しいもの

～ 立柱祭と上棟祭 ～



春の息吹が深まりゆく三月、静寂の杜にこだまするのは遷宮へとつながる祈りの言霊…。

「コーン、コーン、コーン」

青の素襖烏帽子に掛明恵の凛々しい姿の小工八名が打つ木槌の音が新御敷地に響き渡る。
参列した約百名の白い斎服の神職。神域はあたかも古代絵巻の儀式の舞台と化す。

“立柱祭”は御正殿の建築の初めに際し、新しい御柱を立て固める祭儀である。
最初に屋船大神に神饌が供えられ、「大宮柱の堅固で動くことなく守り給え…」と祝詞が奏上される。
屋船大神は造営の守護神であり、建築にかかわる祭儀においては必ず平安が祈られる。丁重な八度拝の後、この神事
の中心である御柱の打ち固めが行なわれ、儀式が無事終了した事が大宮司に報告され立柱祭を終える。
同日の午後から行われる御形祭は御正殿の東西の妻の東柱に御形～御鏡形を穿つ祭である。

“上棟祭”は立柱祭の約三週間後、御正殿に棟木を上げる祭儀である。八年間に及ぶ造営の課程で最も重要であり、忌鍛冶、小工ら造営関係者、神職、そして各界からの列席者を迎えて約三百名が祭を見守る。
儀式は正殿が古規通りの位置にあるかを測量する「丈量の儀」から行われる。
社殿の中心から博士木（基本となる木）までの丈量に相違ないことが確認されたのち、棟木から引かれた二条の白布網が結わえられ「上棟の儀」が始まる。
棟木から引かれた二条の白布網、東側の一条を曳くのは青い素襖烏帽子の小工、そして西側の一条を手にするのは白い斎服に身をつつんだ神職およそ八十名である。

「千歳棟！」 小工の頭が声高らかに唱える。

「おー！」 御殿の棟木の上に控える小工が木槌を振りおろす。

「万歳棟！」 「おー！」

「曳曳億棟！」 「おー！」

(外宮は「曳曳棟」)

宮大工たちの心と技を尽くした結晶が素晴らしい響きをもった寿言となり、
千古変わらぬ神路の山々に奥深くこだまする。

この後、北西（乾の方位）に餅がまかれ屋船大神を祀る祭儀が行われ、上棟祭は終了する。

二十年に一度の式年遷宮は、一切を新しくする事によって神々も国も瑞々しく甦る。
永遠に光り輝く命を伝え続ける日本の祈りは、時を経てなお未来へと伝えられていく。神宮はまさに常若の聖域である。

日本の建築や文化に対する深い理解と尊敬の念を持ち、帝国ホテルの建築にも携わった建築家、Antonin Raymondは次のように語っている。

「伊勢の深い森のなかに世界で一番古くて新しいものがある。」

新しい神殿が姿を見せるのは平成二十五年、夏一。

遷宮祭直前、お白石奉獻のときである。

● 神宮遷宮記 第一巻～第七巻

(神宮司庁／編纂 一～四・表現社 五六・神宮式年造営庁 七・国書刊行会 L174/ジ/1～7)

● 伊勢神宮のこころ 式年遷宮の意味 (小堀邦夫／著 淡交社 L174/コ)

*立柱祭・上棟祭は遷宮諸祭の中でも天皇陛下に日時の御決定を仰ぐ重要な祭儀である。

第62回式年遷宮

立柱祭	皇大神宮	平成24年3月4日	10:00
	豊受大神宮	3月6日	10:00
上棟祭	皇大神宮	3月26日	10:00
	豊受大神宮	3月28日	10:00

図書館だより
2012年3月号より